152 日本美術の修復ー美術品を次の時代へ（2023 年３月 16 日）

フランスにある美術館を見学していると、全国各地の美術館が日本美術のコレクションを所蔵していることに驚かされます。多くの作品は、19 世紀後半以降にフランス人コレクターによって集められたものと考えられ、日本の美術品がフランス人を惹きつけてきた歴史が分かります。

以前に、金継ぎについてご紹介しました（※）。金継ぎとは、ヒビが入ったり、一部が欠けてしまった陶磁器の破損部分を漆で接着し、金粉を施す修復技法のことです。最近は、陶芸作品の装飾技法の一つとして金継ぎが用いられるようになり、フランスで金継ぎの技術を持つ人を見つけることは難しくありません。しかし、日本画、掛軸や屏風といった作品が痛んだときは、どのようにして修復しているのか、疑問に感じていました。実は、コラリー・レグルさんのように、ヨーロッパで活躍する日本美術の修復士がいらっしゃいます。

レグルさんは、学生時代に日本美術と出会い、日本で美術品の修復の技術を学びました。レグルさんは、日本美術の中でも、日本画、掛軸や屏風の修復を専門としています。書や絵画の作品を、掛軸や屏風に仕立てることを表装又は表具と言います。掛軸の場合は、書や絵が描かれた本紙と呼ばれる部分は、紙又は絹が使われます。作品は、八双（棒を布で包んだ上端）と軸木（最下部の巻き取り棒）に挟まれています。多くの場合、軸には桐の木が使われます。また、屏風の基本的な構造は、木枠に紙や布を貼り付けたものです。すなわち、表装された作品の多くには、紙、布と木材が使われています。レグルさんによると、西洋美術の作品の修復の場合は、グラフィックアート、絵画、織物というように材質によって専門が分かれています。一方で、表装された作品を修復するには、日本画の技術に加えて、布や木材の扱いについても熟知していなければなりません。これが、日本美術と西洋美術の修復の大きな違いの一つだとおっしゃいます。

もう一つ、レグルさんが教えてくださったことがあります。それは、日本の美術品を修復するときには、あえて修復した箇所が分かるように修復する方法があるということです。この技術には、本来の色よりも薄い色合いが使われます。この線は、遠くから見ると人間の目には修復した部分が作品と一体に見えるものの、近くで見ると色の違いが分かります。色の違いは、見た目に違和感がなく、修復された部分を見分けることができます。美術品の修復の際に、元の状態に戻すことができる技術を用いることで、作品を次の世代へ受け継いでいくのです。

ヨーロッパにある日本の美術品を私たちが良い状態で観ることができるのは、ミュゼ・ド・フランス（フランス文化省が認定した美術館）公認のレグルーさんのようなヨーロッパで活躍する修復士の方々の努力があります。美しく蘇った作品は、ヨーロッパで日本の伝統文化を広く伝えてくれています。

コラリー・レグルさんのサイト　http://www.hyogu.fr/index.php/fr-fr/
※121 欠けたところをさらに美しく一金継ぎ